

『日展に考える』

これは日展の場合にだけいうことではないが、作品の持つ近代性
 のことである。昔々から床の間に掛けならされてきたようなものを
 にわかに排撃すべきではない。それはまたその中の良さ美しさも極
 めて大切なのであるが、ただそればかりではちよつと困るのである。

われわれの日々の生活の大きな処置は、いつまでもいつまでも床の
 間や違い棚式の鑑賞だけで足り満ちてはいないのである。洋服を着
 て椅子に倚つて一碗のコーヒーを呑みながら、近代文学の批判もし
 ているのである。だからせめて一会場の中にある何点かの作品には
 この生活に即するものが匂い出てほしいと思うのである。これはた
 だ作品傾向とでもいうか墨の上の働きだけをいうのではなくて、も
 つと範圍を広げて考えて、書写材料にもまた書写の詞句にも、深い
 考究が費されてほしいと思うのである。

紙にしても必ず雅箋、鳥の子ということではなく、もつとラフな
 紙にもあるいはもつと堅い紙にも、あるいは洋紙系統にも試みてみ
 ること——是非こんな材料をと用うのではなく
 て仮にひとつの例として——表装にしても条幅、
 屏風などという型にならず、ちよつとした洋間
 の応接などに掛けられる洋額風のもの、あるいは
 はマントルピースの上に置いて眼に親しめるもの、
 もしくはゴブランの大壁掛けのごとく大広間の
 大壁面に壮大な展開を現すもののように、もう
 そろそろ多少づつでも新しい型も出始めるわけ
 にはいかならないものであろうか。

それから書写資料の詩や句も、遠い時代の蒼
 古な言葉も楽しいし、漢詩の表現も宜しいし、
 万葉、古今から、近世の短歌式のもの、みな文
 学として民族の文化財の中の大切なもので一々
 結構ではあるが、これもこの限界のものだけで
 いつまでもいつまでも広い鑑賞を持ち得るだろ
 うか。一面に漢字の並んだものを本当に読んで

くれる人があの展覧会場の中にいく人いるだろうか。ただ習慣的に
 こういうものは何となく有り難そうだな——と思つて見ている人の
 方が多いのではあるまいか。もしそうでないにしても筆致の妙趣は
 楽しんで、その詩句には冷淡であることはいなまれない実状では
 あるまいか。漢文や古歌がこの芸術と実にくまなくマッチしているこ
 とは、この文学圏の中に最初から生育をしたからで、今後も決して
 これは毀してはならないひとつ良い美術体系だとは思つが、しかし
 ただこれもこのままでいて良いものではあるまい。世の芸術愛好者
 は日々古典や古詩、和歌俳句を読んでばかりもいるまい。近代詩や
 海外の文学などに眼をさらしている文化人がいよいよますます多く
 なる現状から書が離れていつてよいだろうか。書といえども現代書
 道という言葉だけでない主張をするならば、この現代文学がその書
 写の領域に入れられ、これの消化も考究されてあらねばならないの
 ではあるまいか。新しい詩、新しい文学の一節が墨のあやによつて
 表現される芸術作品になったものも、ああいう会場の中に何点かは
 さまつていたら、どのくらい書の分野が、否、鑑賞分野からも広さ
 を見せてくれることであらう。(つづく)

『筆間雜記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。

三好達治の書

三好達治先生の詩よ